メルロ=ポンティとG・ゲクス

――ソルボンヌ講義における『遺棄神経症』解釈

酒井麻依子

はじめに

メルロ=ポンティは一九四九年から五二年の児童心理学および教育学の講座（以下ソルボンヌ講義）において、幼児期を自己と他者の境界が築かれる以前の自他未分化状態、癒合状態と表した。すでに『知覚の現象学』［註1］から見られるそうした記述は、原初状態における自己と他者の平和的共存と、それに基づく人間同士の必然的な和解を説いたものとときおり受け取られてきたように思われる［註2］。そのような解釈の傾向は多かれ少なかれ『知覚の現象学』の次のような記述に重点を置いてメルロ=ポンティを理解したものであると考えられる。

コギトとともにヘーゲルの述べるところの、各自が他の者の死を追い求めるという意識同士の闘争が始まる。闘争が始まるためにも、各々の意識が、否定すべき数々の異なる現存に気付きうるためにも、諸意識は共通の地盤をもたねばならず、幼児の世界における自分たちの平和な共存を覚えてなくてはならない。

(PhP, p. 413 /II, p. 221、強調引用者)

『知覚の現象学』の時期のメルロ=ポンティによれば独我論の場合のように他者知覚と相互主観的世界の可能性が問題となるのは成人においてのみであり(Cf. PhP, p. 412 / II, p. 220)、成人に比して幼児は自分自身や他人を外界から区別された私的な主観性としては意識しないし、他人や彼自身が一度に一つの場所やパースペクティブしかとり得ないということを知らない。

このような自他未分化性を平和と記述することはメルロ=ポンティによる幼少期の懐古や理想化に見え、読みようによってこの引用箇所は、現実の争いを乗り越えるためには原初の状態を思い出しそこに還帰しさえすればよいのだとも聞こえてしまうであろう。それは故なきことではない。サルトルの追悼文「メルロ=ポンティ」が描いてみせた、幼年時代にあこがれ、その「楽園」[註3]からの追放を一時的に忘れさせてくれる母親を自分の命のように愛していたメルロ=ポンティ像からも、われわれはメルロ=ポンティの他者論が上のような傾向を持っていると考えたくもなる。確かに『知覚の現象学』当時のメルロ=ポンティがそのようなナイーブな考えをしていたという可能性は否定できない。だがわれわれは、こうした原初的な自他未分化性がソルボンヌ講義[註4]においては、病理的な対人関係の可能性も考慮した、必ずしも平和とは言えない要素を含みうるものとして示されているという点を本稿で示したい。そのためにわれわれが注目するのは、ソルボンヌ講義においてメルロ=ポンティが非人間的な愛の様相として言及する「遺棄神経症」である。

「遺棄神経症 nevrose d'abandon」とはスイスの精神科医・精神分析家オディエ（Charles Odier 1884-1954）によって提唱され、同じくスイスの心理学者・精神分析家のゲクス［註5］（Germaine Guex 1904-1984）によって発展的研究がなされた病理であり、ゲクスの研究の成果は著作『遺棄神経症』にまとめられている。遺棄神経症は今日、境界性パーソナリティ障害と呼ばれるものに非常に近いと思われる［註6］。ちなみに本稿でも用いるアバンドニック［註7］という言葉は、ゲクスの用法に沿って遺棄神経症者のことを指している。

精神分析とメルロ=ポンティ哲学との関係を探る研究はこれまでにもなされてきたが、それらは主にS・フロイト、M・クライン、J・ラカンといった著名な分析家との関係においてであったと言って良いだろう［註8］。もちろん彼らのメルロ=ポンティに与えた影響が多大なものであることは疑いえない。しかし同時に、メルロ=ポンティはしばしば、今日忘れられた精神分析家ゲクスに言及しており、紙幅の関係上本稿では扱えないもののプルースト読解を通した愛の分析などにも役立てていることから、ゲクスはメルロ=ポンティの他者論を把握する上での一つの重要な鍵になると思われる［註9］。

本稿でわれわれは、『遺棄神経症』［註10］がおそらく国内ではあまり読まれていないであろうことを考慮して、ゲクスにある程度即す形でこれをまとめる。その後に、ソルボンヌ講義当時、メルロ=ポンティがどのようにゲクスを参照し、遺棄神経症という病理の考察を彼の他者論に取り入れたかに注目する。今回扱うのはソルボンヌ講義の中でも「幼児意識の構造と葛藤」および「幼児の対人関係」の章である。

1　G・ゲクスの議論

『遺棄神経症』について紹介しておこう。この著作は精神分析の潮流の中ではあまり目立っていないものの、一九五〇年に出版された後、フランスにおいてはメルロ=ポンティによって講義と論文で度々取り上げられたほ

か、フランツ・ファノン『黒い皮膚、白い仮面』(1952)でも取り上げられており、一九八三年には『遺棄神経症』のドイツ語訳も出版されている。ゲクスはこの症例の呼称をより適切にするべく、再版にあたって著作名を『遺棄症候群 *Le syndrome d'abandon*』(1973)と変更している。現在ゲクスの原典はいずれも絶版になっているが2015年に英訳が出版されたことは注目すべきであろう。本章においては『遺棄神経症』の中でもゲクスの主張にとって重要と思われる箇所とメルロ=ポンティの議論に関わる箇所を中心的に扱う。

1-1　アバンドニックの概要

遺棄神経症においてアバンドニックたちは彼らに欠けている情緒的安心感を追い求め、見捨てられることへの不安に苦しんでいる。彼らは直接的なものしか信用することができないために、相手に友情や愛情の証拠を示すように無際限に要求し、その振る舞いのせいでかえって相手を遠ざけてしまって、実際的な情緒的関係を築けない(だが本人はそれに気づかない)。遺棄神経症的な愛は相手の不在を認めず、また相手の愛を他の人と分かち合おうとしない嫉妬深いものである。さらにゲクスによれば、アバンドニックにおいては超自我が不在である。というのも彼らは超自我の形成に必要な段階に達したことがなく、前エディプス的段階にとどまっているためである。それゆえ超自我の存在を前提とした伝統的な精神分析の治療は、アバンドニックに対してはうまくいかない。それどころかエディプス的解釈を加えることが神経症と患者の苦悩の本質を覆い隠し、遺棄神経症のメカニズムを強化してしまうこともあるという。

遺棄神経症がどのような病理であるかをゲクスに立ち入って示そう。遺棄不安、攻撃性、無価値化の三つが遺棄神経症の中心的特徴をなしているように思われる。

a 遺棄不安

アバンドニックは、幼少期に親に見捨てられたと感じている。実際にトラウマ的な遺棄を体験している場合もあるが、そのような体験が実際にはない例も多く存在する。ゲクスは、たいていの場合遺棄神経症の発病は遺棄体験そのものというよりも、子ども〔患者〕自身の気質と親〔養育者〕の情緒的態度の二つに大きく因ると述べている（Cf. Guex, p. 94 / p. 70）。この〈見捨てられた〉という感情を持っていることによってアバンドニックは情緒的な安心感を持てず、そして目下情緒的関係を取り結んでいる相手から再び見捨てられるのではないかという不安につねに苛まれている。

b 攻撃性

アバンドニックにとって、かつて幼少期に味あわされた遺棄の苦痛は周囲がいくら償っても償われつくすことはあり得ない。アバンドニックは直接的な愛の「証明」を絶えず求める。なぜなら通常の場合、人は相手の諸々の行動の中にそれらを超えた意図や心情を見出すものだが、アバンドニックにとって内面や感情、意図などは信用のおけないものであって、具体的な「事実」によってしか相手の愛情を確認することができないからである［註11］。

例えばアバンドニックは自分の欲望や苦しみをはっきりと表現せず、愛されているのであれば自分の望みが全部相手にわかるという形でそれが証明されるはずだと密かに期待している。そうならなかった場合はたいていい絶望し、相手の愛が足りない証拠だと言って辛辣に非難する。この行為をゲクスは「証明のための試験にかける［mettre à l'épreuve pour faire le preuve］」（Guex, p. 18 / p.10）と呼ぶ。

また、アバンドニックは幼児と同様、対象の全能性を魔術的に信じているため、〈相手が私に会いに来ること

を本当に望みさえするならば、あらゆる物理的、心理的な障害を乗り越えられるはずだ〉と考える。それゆえアバンドニックにとって、面会に際する対象の病気、事故による欠席や遅刻は、面会の拒絶だとか、患者への不興などの意味を持った「事実」として受け取られる。アバンドニックは現実の偶発事を認めず、またどのような相対的なものも容認することができない（「絶対的なものへの欲求」）。少しでも患者と対象の関係が傷をこうむると、それは取り戻しようのないほど破壊されたとアバンドニックは考える（「全か無かの法則」）。

しかしこれらの攻撃性はたいていアバンドニックによって外在化され、つまり投影されて相手や周囲、出来事そのものの属性になってしまう。

c 無価値化 non-varolisation

これは価値下げ［dévalorisation］とは別ものであって、無価値化とはそもそも自己についての価値感情が手に入れられなかったということである。幼少期にありのままの自分では愛されないと感じたために、あるいは自分に非があったから捨てられたのだという思いから、アバンドニックは自己が無価値であるという感情を持っている。他人との比較はつねにアバンドニック本人の不利になるようにしか行われない。

アバンドニックは、自らのさまざまな問題を頻繁に両親が自分を十分に愛してくれなかったことの帰結と見なし、両親を原因にできないようなときには、代わりに対象（性的対象、愛憎の感情が向かう相手のこと）を責める。それゆえアバンドニックが自分を卑下し傷つけることは、愛情の足りなかったかどで対象や両親に復讐することに等しい。このアバンドニックの自己に対する無価値化は、アバンドニックが人生において自分が取るに足りない余計な人間で、周囲から「排除されている」（Guex, p. 35 / p. 23）と感じることにつながる［註12］。さらに無価値化は患者自身の無力感にも関わる。

幼児の受け取り、独占する〔captif〕段階に固定されていることで、アバンドニックは他人にすべてを期待する。深刻な場合には、献身的〔oblativement〕に愛することができないだけでなく、アバンドニックは人生のあらゆる領域において受動的にとどまる。（Guex, p. 22 / p. 13）

この受動性は、他人を自分の欲望に従属させるという意味での支配でもあり、さらに患者が責任を避け他人に責任転嫁する態度としても現れる（アバンドニックにはしばしば「責任への恐れ」が見られる）。

1－2　アバンドニックの愛

アバンドニックの概観をまとめたところで、アバンドニックに特徴的な愛の観念について確認しておきたい。すでに前節でも多少確認したが、それらも含めたアバンドニックな愛に関する議論こそメルロ=ポンティがゲクスから取り入れた最重要項目である。もっともメルロ=ポンティ自身は、この節で扱うアバンドニックの愛と死についての議論には言及していないのだが、彼がゲクスの著作を読んでいる以上、この議論から影響を受けていないとは考えづらい。

アバンドニックが求めている愛情とは性的なものではない。アバンドニックの多くは、性愛に興味を持たず、性行為に際して退屈や苦痛を覚え、パートナーのために苦行を強いられているという認識を持つようである。アバンドニックの追求する愛のイメージを、ゲクスはある女性患者が記した手記を引用することで明確に示している。

人間の味わう根本的な孤独の苦しみは、その外部のものとの調和的な融合が実現されることがない以上、つねに存在するのではないか。この融合は存在〔l'être〕の達成であるが、ある人〔un être〕の愛において、そ

> してさらに高いところでは、神の愛において生じうる。世界と調和しており、世界に吸収され、世界を吸収する人間はもはや一人ではないのだが、この孤独でない状態の追求こそがわれわれをかくも激しく悩ませる。(Guex, p. 36-37 / p. 24)

ゲクスはこの引用に注釈をつけており、「あらゆるアバンドニックと同様にこの患者にとって孤独でないこととは、成人が思い描き実現するような愛情深い関係からなるのではなく、母親へのえも言われぬ帰属の状態へ還ることからなるのである」(Guex, p. 37 / p. 110n5) と指摘する。こうしてみるとアバンドニックの求める愛とは、いわゆる原初の母子関係、あるいは胎内にいたときのような自他の一体感を求めるものであると言うことができよう。このような愛の追求は、実はアバンドニックの死の観念と非常に強いつながりを持つ。

アバンドニックにとって愛する対象の死は、離別や新たな遺棄体験という意味においては脅威だが愛の全面的で永遠的な所有であるという意味においては最終的な救いである、とゲクスは述べる。というのも対象その人が死んでしまえば、もはやその度々の不在に苦しむ必要もなく、それゆえ本当に自分が愛されているのかという疑いや遺棄不安を抱く必要もなくなるからである。ゲクスは彼女の経験から言って、アバンドニックの事例において死が利得と見なされた場合の方が頻繁であると述べている。

> 多くのアバンドニックにとって、死は破壊とは全くの別物であり、それは達成なのである。離別ではなく結合なのである。闘争ではなく平安〔repos〕なのである。(Guex, p. 51 / p. 36)

この平安としての死の観念はアバンドニックに、愛する対象の死を求めさせると同時に自らの死を望ませる。ゲ

クスによると、アバンドニックにとって死は過去の失敗を精算し無垢の幼児の状態に戻ることに等しい。

1-3　エディプス・コンプレックスとアバンドニック

本章の最後に、ゲクスが『遺棄神経症』において最も力点を置いた主張を示しておこう。通常、精神分析において神経症は超自我による禁止が原因となって生じると考えられている。しかしアバンドニックは超自我の形成以前にとどまっていることから、彼らの不安は去勢不安でもなければ、罪悪感に起因する不安でもなく、寄る辺なき現実世界に対する不安である。

アバンドニックの場合、エディプス・コンプレックスは患者において未だ通過されていないため、治療の前提となるべきものではない。だが伝統的な精神分析は、しばしば患者において未だ到達されていない自我や情緒の発達を前提する傾向にあるために、的外れな解釈を加え患者を苦しめてしまうことすらある。例えば伝統的な分析治療を受けたある女性患者は、ゲクスの前に分析を担当した分析家から、一通りの治療の最後に「あなたはもう子供ではないのだということを覚えておいて」という言葉をかけられ、長らく痛ましい苦悩に陥って自宅から出られなくなる。彼女はこれまで以上に自らの幼児性（しかももはや容認されない幼児性）を意識するようになり、苦悩と自己嫌悪の内で生きることとなった（Cf. Guex, p.140 / pp. 106-07）。

ゲクスによれば、特に遺棄神経症のような場合はエディプス・コンプレックスを前提するべきではなく、分析の過程の中でエディプス的なものが現れてきたとき、むしろそれは治癒の兆しである。ゲクスは『遺棄神経症』の最後でエディプス・コンプレックスを幼児期から抜け出す決定的な一歩と位置づけ、それが「人間的発達の二段階、自我の二つの構造、神経症の二つの構造の境界を成す」（Guex, p. 141 / p. 107）と述べている。

このことから理解できるのは、ゲクスが一方でエディプス・コンプレックスの関わらない神経症の存在を提唱

し、伝統的な精神分析の療法を批判したものの、他方でフロイトの唱えたエディプス・コンプレックスの理論には価値を認め、発達における第一段階、つまり幼児の魔術的思考と〈受け取り独占する態度〉の段階から、第二段階、合理的な思考と〈献身的な態度〉の段階へと移行する分水嶺としているということである［註13］。

2　メルロ=ポンティの解釈

以上の概説を踏まえて、メルロ=ポンティにおけるゲクス受容を検討しよう。彼はゲクスの研究をソルボンヌ講義「幼児意識の構造と葛藤」の章で詳細に紹介している。

ところで、なぜ肉体的・知性的には成熟しており、自己と他者の区別がついているはずのアバンドニックにおいて、情緒面における発達の遅延、つまり自分の攻撃性を相手に投影するといった自他未分化の傾向が残るのかについて、メルロ=ポンティは、情緒面での発達の方が知性面の発達よりも「さらに困難であり、遅ればせである」（Sorb, p. 232）ためだと答える。彼は、情緒的葛藤があるとき私に帰せられるものと他人に帰せられるものとの峻別は困難であるという考察を、恋人たちの破局を例に示す（Cf. Sorb, p. 232-33）。そして彼によればアバンドニックにおいて、この情緒面における自他未分化の傾向はより強められるのである。

アバンドニックと幼児の構造を同一視するゲクスの態度をメルロ=ポンティはそのまま受け継いでいるように見える。一般的にメルロ=ポンティは病者における退行は幼児期への還帰ではないとしており、病者の構造と幼児の構造を単純に同一視することについて否定的である（Cf. Sorb, p.175）。しかし遺棄神経症はゲクスの理論に沿うと退行ではなくいわば停留による病理であることになるためか、必ずしもその限りではない。むしろ彼は病理という文脈を捨象した上で、アバンドニックを積極的に幼児になぞらえ、遺棄神経症の中に他者経験におけるある

種の本質を見ている。

2－1　アバンドニックから見える他者経験の本質

メルロ＝ポンティは幼児が現実的なものと想像的なもの、主観的なものと客観的なものの二元化されていない「夢幻状態のあいまいさの中に生きている」（ibid.）と述べる。そしてアバンドニックの態度も幼児と同様に「夢幻的［onirique］」（Sorb, p. 233）であると言われる。しかしそのような夢幻的生活は、より合理的で客観的な成人の生活によって解消されるべき否定的な生活というわけでは必ずしもない。

> アバンドニックの態度は、われわれの他者知覚における避けがたい一要素を極限まで押し進めたものにすぎない。［…］「外面主義［externism］」［註14］が、つまり私の感情の外在化（エクステリオリザシオン）（そして反対に他人の感情の私への取り込み）が、諸対象との関わりの中の不合理が、他人との関わりにおいてある。（Sorb, p. 233）

それゆえかなり程度は弱まっているとはいえ、健康な人同士の関係もまた現実的なものであると同時に想像的な色味を帯びた、いくばくか夢幻的なものであると言える。ソルボンヌ講義「他者経験」（1952）でも示されているように、メルロ＝ポンティにとって他者知覚とは、決して全面的に開示され得ない他人の部分的な表れを通じて間接的に、他人の思考や感情、ひいては他人の人格そのものへと到達しようとする運動であった［註15］。したがって他者知覚において、われわれは物質的に示されている以上のことを、上の意味での想像で補っていると言い得、そしてこの想像の機能を担うのが投影と取り込みである。

メルロ＝ポンティの言うところの投影と取り込みとは、私が他人と交流するとき私は私の感情を相手に与えてし

まっており、また私の方でも他人の感情を受け取ってしまっているということである。これらは前人称的な間身体的交流の別の言い方であり、私にとって他人を人間として生気づけている当のものである。それゆえメルロ=ポンティにとって〈投影－取り込み〉の現象は必ずしも病理的なものではなく、人間が幼少期に住まっていたと想定され、成人の生活の根底に存続する夢幻的な生活の名残であり、さらには、われわれの対人関係にとり不可避的かつ不可欠な要素であると考えられている。メルロ=ポンティは、仮にこの想像の「魔術的〔de sorcellerie〕」(Sorb, p. 233) な働きが無かったとすれば「愛は慣習にすぎず、他人はそこにいないことになろう」(Ibid.) とすら述べている。

以上のようにメルロ=ポンティは、遺棄神経症の中に他者経験の本質的な要素を見出す。メルロ=ポンティはそのような所作において、ゲクスの遺棄神経症に関する研究から症例研究という文脈をはぎ取り、彼女の議論を他者論へと応用していると言える。

2－2　交流の要請

他者経験にとって〈投影－取り込み〉の現象、つまり間身体的交流が不可欠なものであったとしてもそれが全てではない。この〈投影－取り込み〉の段階は、言うなれば自己と他者のうち、一方が他方の分身や鏡像にすぎないような段階である。そこにおいて主体は、アバンドニックのように、自分の欲望や劣等感から相手の意図を断定し、あるいは現実の出来事を意味づけ、他人を激しく攻撃してしまうことがありうる。これこそが〈独占的態度〉の段階なのであり、人間たちの交流が自分の分身との独語的やりとりではなく、異なる人格同士の交流であるためには〈献身的態度〉の段階への移行が必要となる。

メルロ=ポンティにおいて幼児の〈独占的態度〉とは、幼児が自由を実現するための能力を欠いているという状

態そのものが、成人と幼児の間に必然的にもたらす不均衡で非相互的な関係である（Cf. Sorb, p. 233-34）。したがって障害ないし病理が生じるのは自他未分化性そのものによってというよりも時期の錯誤によってなのであって、幼児が自由を実現する能力を得た以後にも、成人と（元）幼児のいずれかがそれまでの対人関係を保持しようとすることが問題なのである。親子関係や恋人同士の関係が僭主と奴隷のような関係を取り結ぶことになるのはおそらくこのような場合だと、メルロ＝ポンティは述べている（Cf. Sorb, p. 92）。

それゆえアバンドニックや幼児において他者経験の重要な要素が見出されるとしても、もはや幼児ではないわれわれがその〈失われた楽園〉を追い求めようとすれば、対人関係は必然的に歪みを孕んでしまうことになろう。

> 幼児においては、その身体的な劣等と能力〔talents〕の不均衡ゆえに、他人に対してこの寛容さ、他人の自由へのこの承認を持つことができないのであり、成人はそれら〔寛容さと承認〕によって「魔術」を脱して、交流へと赴くのである（Sorb, p. 234）

さらに、この異なる人格同士の「交流」をメルロ＝ポンティはある種の当為として語っている。

> 私が彼について持つイメージに他人が順応することを強いないような、交流を築かねばならない（Sorb, p. 231）

これに加えて「幼児の対人関係」の第二部で、メルロ＝ポンティはフロイトにおけるナルシシズムと対象関係についての議論の中に――それらを〈独占的（キャプタティフ）〉と〈献身的（オブラティフ）〉と読み替えた上で――前者から後者への移行が「責務〔tâche〕」（Sorb, p. 335）であるという発想を読み込んでいる。別途検討の必要があるとはいえ、この箇所はフロイトの忠実な読解というよりも、むしろメルロ＝ポンティの考えをフロイトに仮託して述べたものと推測される。

上の「責務」という表現が意味するのは、人間の発達において〈献身的態度〉が、肉体の成長のように栄養さえとっていれば必然的にやってくるような「状態（エタ）」（Ibid.）ではなくて、例えば嫉妬の克服がそうであるように困難と葛藤を伴い、主体が〈独占的〉と〈献身的〉の二つの態度の間で行きつ戻りつしながら［註16］、ようやく到達されうるものであるということであろう。なにより注意せねばならないのは、ここでの〈献身的態度〉は元々ゲクスの言葉ではあるものの、病理の議論からすでに大きく隔たっている点である。ゆえにメルロ=ポンティはここで、上述の分析家のように、アバンドニックに成人にふさわしい態度をとるよう諭しているわけではない。先の引用は病理についてというよりむしろ、幼児の一般的な発達について述べられていると考えられ、またこれ以上は踏み込まないが他者との交流における道徳としても読むことが可能である。

メルロ=ポンティによるゲクスの概念の一般化は例えば「幼児は必ずアバンドニックに愛する」（Sorb, p. 234）という記述からも、また次の記述からも見て取れる。

> 幼児の〈独占的愛〉は決して証拠に飽き足らず、ついには自分の内在のうちに相手を閉じ込め、幽閉する愛である。（PA, p. 228 / p. 191）［註17］

ここからもわかるように、アバンドニックの〈独占的態度・独占的愛〉は、メルロ=ポンティにおいて、本来の厳密に遺棄神経症的な意味を薄められ、せいぜい〈幼児的な非寛容の態度・愛〉というニュアンスを帯びるに至っている。

そのような〈独占的愛〉に、「証明しうる以上のことを信じ、実践の寛容さによって、生み出される中でおのれを証明する行動によって、感情の現実性に唱えられうる疑いを乗り越える」（Ibid.）愛、すなわち〈献身的愛〉が対置され、ある意味で要請されていると考えられる。

2-3　幼児の闘争から成人の平和へ

メルロ=ポンティにおいて、エディプス・コンプレックスを境とした〈独占的態度〉から〈献身的態度〉への移行は不可逆的なものというわけではなく、むしろ不安定なものであって、第二の〈献身的〉段階に入っても第一の〈独占的〉段階の〈投影-取り込み〉のような特徴は決して完全に消滅することなく存続し続け、病理や嫉妬・愛などの情動的状況といった何らかの拍子に強まり顕在化する。

それらのことを踏まえた上で、次の引用を確認しよう。

> 成人の状態への移行は、第二の状態への移行である。第二の状態において、人間は人間にとって魔術師ではもはやなく、他の二つの自由にとって各自由が脅かされるものではなくなる。(Sorb, p. 231)

この引用の「他の二つの自由にとって…」のくだりは、サルトル『存在と無』における愛の話を念頭に置いたものではないかと推測できる。そこには、恋人同士の二人がまなざしの相剋を解消しようとして、各々が自分を相手のまなざしによって対象化してもらおうとする(つまり相手を魅惑しようとする)最中に第三者のまなざしが登場し、カップルを二人とも対象化してしまうという筋書きが描かれている。その構図の場合、一人の自由な意識としての人間は――上の第三者の登場に加えて、恋人が突然自分を愛さなくなるという可能性もあることから――残り二人の自由な人間によって脅かされていることになる。したがって上の引用からは、ソルボンヌ講義のメルロ=ポンティ他者論の図式における第一段階がサルトル的な相剋状態に重ねて捉えられていることが読み取れる。

興味深いのは、『知覚の現象学』の時点では、コギトの出現とともに意識同士の闘いが生じるという、〈幼児の平和から成人の闘争へ〉という図式が描かれていたのに対して、このソルボンヌ講義の言述においては幼児期の〈投影-取り込み〉のような魔術的対人関係が〈人間がほかの人間によって脅かされる状態〉として捉えられた上で、その脅威が成人において止むとされており、〈幼児の闘争から成人の平和へ〉という図式へと変化している点である。確かに『知覚の現象学』の議論が幼児期と成人期という二段階の図式を採っているからといって、それを単純にソルボンヌ講義の二段階の図式に重ねることは無理がある[註18]。しかし少なくとも指摘できるのは、『知覚の現象学』の前期とソルボンヌ講義の中期のいずれにおいても間身体的交流の重要性が論じられているとはいえ、中期においてはその交流についてさらに踏み込んだ議論がなされているということである。言い換えると、中期においては、もはや交流さえあれば良いというわけにはいかず、交流がいかなる様相であるかが問題とされるようになったのであり、そのような議論の深化ゆえに、幼児期に対するメルロ=ポンティの評価は前期と中期では百八十度の転回が見られるのである。そして、遺棄神経症という病理の記述を通じて幼児的な〈独占的態度〉というものを明示したゲクスは、メルロ=ポンティ他者論を深化させ、中期の新たな問題意識の発生にとって重大な役割を担っていると言うことができる。

終わりに

本稿ではジェルメーヌ・ゲクスの著作『遺棄神経症』の概要を紹介し、ソルボンヌ講義を中心としてメルロ=ポンティによるゲクスの解釈と、ゲクスのメルロ=ポンティ思想への寄与を明らかにすることを目指してきた。

ゲクスによって示された遺棄神経症とは、エディプス・コンプレックスを通過することのなかったとされる患

者（アバンドニック）が、直接的な事実を超えた相手の意図を信頼せずに、愛の証拠を絶えず要求するといったことを特徴とする症例であった。その幼児的な態度への停留はアバンドニックたちに、しばしば死がもたらす、愛する相手との融合（幼児期に想定される自他の一体感）を追い求めさせる。メルロ=ポンティは、アバンドニックに見られる特徴のうち、情緒面での自他未分化のために自己と他者の間に投影と取り込みが生じる現象を、一般的な他者知覚においても不可欠なものであると唱えた。メルロ=ポンティは〈独占的態度〉と〈献身的態度〉といったゲクスの遺棄神経症にまつわる発想を、人間の発達一般へと、あるいは他者経験一般へと敷衍し、自らの他者論に取り込んでいる。

またわれわれは、メルロ=ポンティの前期における、〈幼児の平和から成人の闘争へ〉という発想が、ゲクスを受容した後の中期において、〈幼児の闘争から成人の平和へ〉という図式へと反転していることを確認した。ゲクスは、メルロ=ポンティが前期のころから重要性を主張していた間身体的交流についての考えを彼に深めるよう促し、中期において交流の様相を問題にするところにまで、彼の歩みを進ませたということにおいて、メルロ=ポンティ他者論の発展に大きく寄与した。もちろん、本稿では扱わなかったが、第二次世界大戦のような出来事もまた同じ方向に彼を促したと言え、『知覚の現象学』より後の彼の問題意識がゲクスを契機として一つの結晶化を遂げたと考えることもできるだろう。

本稿の考察を通してわれわれは、『知覚の現象学』の「平和な幼児期」という記述と、サルトルの描いた母親・幼児期への愛着に満ちたメルロ=ポンティ像によって喚起されがちな、幼児と養育者との相即的な関係を理想とするメルロ=ポンティの他者論のイメージに対して、幼児的自他未分化性を理想とする倫理に回収され得ず、むしろそれを退け乗り超えていくメルロ=ポンティの中期他者論を、ソルボンヌ講義における彼のゲクス読解を切り口に示すことができたように思う。

註

[1] Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception*, tel, Gallimard,paris, 2011.『知覚の現象学』I巻、竹内芳郎・小木貞孝訳、みすず書房、一九六七年。II巻、竹内芳郎・木田元・宮本忠雄訳、みすず書房、一九七四年。（以下PhP。原書の頁数を示した後に邦訳の巻数とページ数を示した。）

[2] 例えば高橋哲哉『逆光のロゴス』、未來社、一九九二年でのメルロ=ポンティに対する「あらゆる暴力を普遍的・根源的「和解」の中での「偶然」たらしめてしまう言説」という批判。

[3] Sartre, J-P, *Situation IV : Portraits*, nrf, Gallimard, 1980, p. 263.

[4] M. Merleau-Ponty, *Psychologie et pédagogie de l'enfant : Cours de Sorbonne 1949-1952*, Verdier, 1988. *Child Psychology and Pedagogy : The Sorbonne Lectures 1949-1952*, translated by Talia Welsh, Northwestern univ. press, 2010. 以下Sorb。

[5] スイスの心理学者、精神分析家。一九〇四年フランスで生まれた後スイスに移り、一九八四年に没するまでそこで一生を過ごす。一九二三年から一九三〇年までジュネーブのジャン=ジャック・ルソー研究所の心理学研究室でJ・ピアジェの助手を務め、その時期にR・de・ソシュールに教育分析を受ける。三〇年からはA・レポンの勧誘でモンテーに移る。一九四〇年ローザンヌに移り、フランス語圏のスイスの精神分析発展に尽力した。スイス精神分析協会に所属。（『遺棄神経症』英訳の編集者序文および*International Dictionary of Psychoanalysis*を参照）。

[6] Cf. J. G・Gunderson, *Borderline Personality Disorder: A Clinical Guide*, John Scott &Company, 2001, p. 27.『境界性パーソナリティ障害：クリニカル・ガイド』、黒田章史訳、金剛出版、二〇〇六年、p. 44. 当該の箇所における症状の描写が『遺棄神経症』のそれと酷似している。

[7] ラプランシュとポンタリスによれば、このアバンドニックという語そのものは広く知られ用いられている（Cf. J.

Laplanche et J.-B. Pontalis, *Vocabulaire de la psychanalyse*, Quadrige / puf, 2013[1967], pp. 273-74)。

[8] 例えばHervé Le Baut, *Merleau-Ponty, Freud et les psychanalyses*, L'Harmattan, 2014.

[9] 本稿の議論に関わる先行研究には以下のものがある。A. Dufourcq, *Merleau-Ponty : une ontologie de l'imaginaire*, Phenomenologica 204, Springer, 2014.E. de Saint Aubert, *Du lien des êtres aux éléments de l'être: Merleau-Ponty au tournant des années 1945-1951*, Vrin, Paris, 2004.澤田哲生「メルロ=ポンティと精神分析――性とエディプスコンプレックスの批判をめぐって」、『実存思想論集』、三一号、pp. 81-100、二〇一六年六月、pp.81-100.「メルロ=ポンティにおける嫉妬と愛」、『立命館大学人文科学研究所紀要』、一一二号、二〇一七年三月、pp. 45-70. 本稿の内容は同拙論のゲクスについての記述と少し重複するところがある。

[10] G・Guex, *La nevrose d'abandon*, Bibliothethéque de psychanalyse et de psychologie clinique dirigée par Daniel Lagache, professeur à la sorbonne, PUF, Paris, 1950. *The Abandonment neurosis*, translated by P.D. Douglas, Karnac, 2015. 以下Guex。原書の頁数の後に英訳の頁数を示した。

[11] ゲクスによれば、見かけのかなたに意図や心情を認識できるためには、認識する側に健全な内的安心感があることが必要なのだが、そもそもアバンドニックにはこれが欠けているのである（Cf. Guex, p. 20）。

[12] メルロ=ポンティはこの「排除されている感じ」をM・プルースト『失われた時を求めて』の主人公マルセルの感情に重ねている（Sorb, 233）。

[13] ゲクスは、知的発達段階（自己と他者、現実と空想の区別）と対人関係における態度の発達段階は比例関係を持つと述べるが、その関係についての理論的な考察はしていない。

[14] 「外面主義externism」とは『遺棄神経症』の言葉であるが、メルロ=ポンティはここでその意味を変えて用いている。ゲクスはこの語によって、他人の意図のような内面を汲まず、あくまでも行動のような外面にのみとどまって他人を判断する態度を指す。

[15] ソルボンヌ講義における他者知覚の議論については拙論「現れる他者・消える他者：ソルボンヌ講義「他者経験」をめぐって」、『メルロ=ポンティ研究』、日本メルロ=ポンティ・サークル、pp. 1-15、第一九号、二〇一五年九月。

[16] この点に「人間と逆行性」（一九五一年）の次の記述が関連すると思われる。「非人間的な要請、つまり絶対的エゴイズムから、主体自身を破滅させる飽くことなき献身までの間を揺れ動く形で、無媒介的絶対という袋小路にとらわれる」（*Signes*, p. 226 / II, p. 132）。この非人間的エゴイズムと破滅的献身の両極は、ゲクスによるアバンドニックの消極－攻撃的［Negatif-agressif］タイプと積極－愛情的［Positif-aimant］タイプの区別に対応すると思われる。

[17] « Les relation avec autrui chez l'enfant », *Parcours*, Verdier, 1997.「幼児の対人関係」、『眼と精神』、みすず書房、一九九九年。以下PAと略記。

[18] 『知覚の現象学』の方で二段階の分かれ目とされるのはコギト、つまり明白な自己意識の在不在であるのに対して、ソルボンヌ講義ではエディプス・コンプレックスが分かれ目であり、前者では自他の認識の発達が、後者では幼児の態度の発達が問題となっていることから、二つの時期の二段階図式は一致しない。ここにはメルロ=ポンティの哲学的議論と彼の精神分析・心理学的議論の折り合いという重大な問題が伏在するのだが、本稿では指摘に留めておく。